教員養成課程における「野外教育実習」の実践報告

Implementation Report on “Practical Training in Outdoor Education” as a required subject for the Teacher Training Course

粥　川　道　子　　杉　岡　品　子
Michiko KAYUKAWA　　Shinako SUGIOKA
青　木　康太朗
Kotaro AOKI

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
第２号　2011

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要　第２号　平成23年３月
Bulletin of Hokusho University School of Lifelong Sport　No. 2　March, 2011

教員養成課程における「野外教育実習」の実践報告

Implementation Report on “Practical Training in Outdoor Education” as a required subject for the Teacher Training Course

粥　川　道　子[1)]　杉　岡　品　子[1)]
Michiko KAYUKAWA　Shinako SUGIOKA
青　木　康太朗[1)]
Kotaro AOKI

Ⅰ．はじめに

2009年に北翔大学生涯学習システム学部健康プランニング学科から発展的改組により設立された生涯スポーツ学部スポーツ教育学科（以下本学科）では，従前は選択科目であった「野外教育論」を学科必修科目に，「野外教育実習」を教職必修科目とした。

「野外教育論」を学科必修科目とした要因は，学生が野外教育の理念にふれることで自然，他者，自分自身に目を向け，自己とそれらの関係を考え，豊かな人間性を築く一因となること。また，野外教育指導者として必要な主体性，課題発見力，組織の中での調整力，協調性，あるいは実行力，指導力，企画力といった能力は，野外教育の専門家に限らず社会人として必要な素養であると捉えたからである。

両要因は生涯スポーツを構築するという強い信念を持ち，実践的指導力とコミュニケーション力を備えた，豊かな人間性を総合的に身につけた人材養成をめざす本学科のディプロマポリシーと重なり，かつ近年，高等教育機関としての大学が社会から求められる「社会人基礎力の養成」につながっている。

次に「野外教育実習」を教職必修とした要因は，2008年公示の新学習指導要領である。新学習指導要領では自然体験活動の充実が強く打ち出されたが，現状では学校教員の野外教育や自然体験活動に関する知識や技能は圧倒的に不足している。その一方で従前から学校教育現場では，宿泊をともなう自然体験活動を保健体育教員が担当する例が多い。したがって中学校高等学校保健体育科の教員養成課程を持つ本学科では，同課程の特色あるカリキュラムとして「野外教育」を位置づけ，「野外教育論」の理論だけではなく自然体験活動の実践から学ぶ体験学習型の「野外教育実習」を教職必修とし，野外教育を通して指導力，企画力，調整力等のある教員養成を目指したのである。

筆者ら野外教育担当者は，本学科の野外教育分野の目標を「高等教育機関に学ぶ本学学生が，より良き社会人となるために主体的に

１）北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

全人的な成長を目指し努力すること。そのために仲間や指導者である教員とともに学ぶ姿勢を育むこと」と定めた[1)]。

上記のねらいの基，野外教育分野では2010年度前期に本学科１期生である２年生を対象に「野外教育論」「野外教育実習」「レクリエーション実技（野外レクリエーション・ニュースポーツ・コミュニケーションゲーム）」を後期には「野外・レクリエーション指導論」「雪上活動実習」を実施した。本論は「野外教育実習」の事前事後の学内講義を除く2010年８月に実施した現地実習について報告する。

Ⅱ．生涯スポーツ学部スポーツ教育学科2010年度「野外教育実習」

１．実習の目的

本実習では，キャンプ生活をベースに様々な野外活動に挑戦することを通じて，保健体育科教諭の養成を行うだけではなく，社会人に求められる基礎的な資質・能力の向上にも取り組むことをねらいとした。そのため，本実習の実施に当たっては，以下の３つを実習の目的として設定した。

⑴　さまざまな活動や課題にグループで挑戦することで，グループにおける自分の役割を発見する力や使命感，責任感を養うとともに，社会性やコミュニケーション能力の育成や自ら主体的・積極的に行動する態度や意識をはぐくむ。

⑵　野外活動を通じて自然の素晴らしさや大切さに対する気づきを促し，環境保全意識の向上を図る。

⑶　野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得させる。

２．実施期間

本実習の実施期間は３泊４日とした。しかし，本実習を教員養成課程の必修科目としたことによって履修生が100名を超えため，履修生を下記のとおり前後半の２グループに分け，同じプログラムを２回行う形で実習を実施した。

（前半）2010年８月24日（火）～27日（金）
　　３泊４日

（後半）2010年８月28日（土）～31日（火）
　　３泊４日

３．実習生

本実習の履修学生は，生涯スポーツ学部スポーツ教育学科２年生153名であった。しかし，全４回の学内事前講義出席を本実習の参加条件としていたため，参加条件に満たない学生や本実習日と介護等体験日が重複した学生等がおり，最終的な参加学生数（以下，「実習生」という。）は114名で，その内訳は表１のとおりとなった。

表１　参加学生数の内訳

	男子	女子	計
前　半	43	15	58
後　半	40	16	56
計	83	31	114

４．実施場所

本実習の実施場所は，生涯システム学部健康プランニング学科（以下健康プランニング学科）の実習先として2005年より毎年利用している国立日高青少年自然の家（北海道沙流郡日高町）とした。本実習は野外活動に関する基礎的な知識や技術の取得を目的の１つと

しているため，宿泊形態は舎営とせず，当該施設が所有する「からまつキャンプ場」でテント泊と野外炊事を行った。

5．組織体制

運営組織の体制は図１に示したとおり，キャンプディレクター（担当教員）を長とする標準的な組織キャンプの形態とした。

本実習の実施に当たっては，「野外教育指導実習」を履修している健康プランニング学科３年生（以下，「３年生」という。）の８名（男子４名，女子４名）が，グループカウンセラーやプログラムスタッフ，マネジメントスタッフ等の役割を担い，組織の中心となってキャンプの企画から運営，指導，安全管理を行った。当該学生は，前年度に「野外教育実習」を履修した学生である。

なお，３年生に対する指導・助言は，担当教員だけではなく，2005年に担当教員と健康プランニング学科の学生をメンバーとして設立した「野外教育研究会」の OB･OG や大学院生がチューター，健康プランニング学科４年生（以下，「４年生」という。）がプログラムスタッフ，マネジメントスタッフ等となって携わった。

本実習の運営に関わったスタッフ数は，担当教員が３名，OB･OG，大学院生，４年生が12名，３年生が９名（「野外教育指導実習」を履修していない３年生１名を含む）の計24名であった。OB･OG 及び学生スタッフは，全員「野外教育研究会」のメンバーである。

6．「野外教育実習」実施までの準備とスタッフトレーニング

本実習の実施に向けてのプログラム企画や準備，スタッフトレーニングは，「野外教育指導実習」の授業（前学期）や実地踏査，他団体が行う研修等への参加を通じて行った。また，実習直前は，実習生を引率する担当者を除くスタッフが２日前から現地入りし，現場確認や受け入れの準備と最終トレーニング等を行った。

(1) 「野外教育指導実習」の授業（前学期）と「野外教育研究会」の勉強会（夏季休業期間）

「野外教育指導実習」の授業（前学期）で

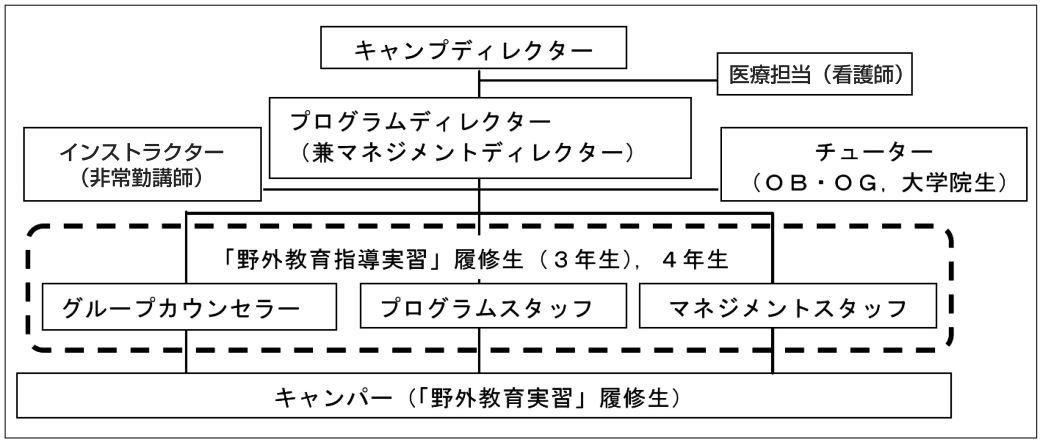

図１．運営組織の体制

は，座学による組織キャンプの基礎理論の復習と本学が有する野外活動の用具（テントやタープ，ガス器具等）の点検・整備の実習ならびにその使用方法や取扱，管理に関するトレーニングとキャンプカウンセリングの体験学習を行った。また，前学期授業終了後は，「野外教育研究会」の勉強会として，プログラム班と食事班に分かれて夏季休業期間中に定期的に集まり，本実習の実施に向けてプログラムの企画や野外炊事のメニュー作りといった準備等を行った。

⑵　実地踏査

「野外教育実習」で実際に活動する現場や使用する設備・備品等の確認，実際に行う活動の指導等のトレーニングを行うことを目的に，2010年８月11日（水）から13日（金）の２泊３日で，国立日高青少年自然の家の実地踏査を行った。実地踏査のスケジュールは，表２のとおりである。

⑶　実習直前

「野外教育指導実習」の履修学生と一部のスタッフは，前半の実習が始まる２日前の８月22日（日）から現地に入り，実地踏査で荒天のため実施できなかった北日高岳登山を行い，登山道の状況を確認した。また，テントサイトやロープスコースといった活動現場の状況や安全確認，野外炊事の食材等を購入等，実習生を受け入れる準備を行った。

「野外教育実習」の履修学生に対しては，実習前日に学内講義を実施した。講義内容は実習期間中の注意事項確認，健康調査確認，個人装備確認等である。いすれも野外活動時における安全教育の視点を学ぶ機会として実施した。

７.「野外教育実習」の様子

本実習は前半と後半の２班に分けて実施した。両班のプログラムは，同一であり表３のとおりである。

本実習の目標の１つは，さまざまな活動や課題にグループで挑戦することで，グループにおける自分の役割を発見する力や使命感，責任感を養うとともに，社会性やコミュニケーション能力の育成や自ら主体的・積極的に行動する態度や意識をはぐくむことであった。目標達成に向けて，全日程を通して行う野外

表２．実地踏査のスケジュール

	８月11日（水）	８月12日（木）	８月13日（金）
午前	大学集合 準備・出発 施設到着	トレーニング② ・クラフト	トレーニング⑤ ・ビーイング ・スポッティング ・ヒッコリージャンプ　等
午後	活動現場の確認 トレーニング① ・エレクトリックフェンス ・島めぐり	トレーニング③ ・テント設営 トレーニング④ ・薪割り ・野外炊事	トレーニング⑥ ・人の字バランス ・クモの巣 ・魔法のじゅうたん 施設出発
夜間	夕食 ミーティング	夕食 ミーティング	大学到着 片づけ・解散

炊事やテント設営や撤収等の野外生活作業の他，ASE と北日高岳登山は，教育的効果が期待できるアクティビティとして設定した。

また，本実習では教員を目指す学生に対し，体験学習法を学ぶ機会として夜間に「ふりかえり」の時間を設定した。本アクティビティでは，実習生自身がその日一日をゆっくりふりかえり，グループで共有する時間とした。

表３　主なプログラムの流れ

	第１日目 （８月24／28日）	第２日目 （８月25／29日）	第３日目 （８月26／30日）	第４日目 （８月27／31日）
午前	集合・大学出発 自然の家到着	朝のつどい 朝食(サンドウィッチ) ＡＳＥ ・ヒューマンチェア ・日本列島　　等	朝のつどい 朝食（焼き鮭） 北日高岳登山	朝のつどい 朝食（パン） テント等の撤収 キャンプ場清掃 マインドクロッキー
午後	開講式 オリエンテーション アイスブレイキング ビーイング テント等の設営 夕食(カレーライス)	昼食（おにぎり） ＡＳＥ ・ウージー ・人の字バランス ・ヒッコリージャンプ ・くもの巣 ・魔法のじゅうたん 夕食（すいとん）	昼食（おにぎり） 北日高岳登山 温泉 夕食コンテスト	グループでのまとめ 昼食（弁当） 閉講式 自然の家出発 大学到着・解散
夜間	ふりかえり スタッフミーティング	ふりかえり スタッフミーティング	ふりかえり スタッフミーティング	

⑴　１日目

初日はどの実習生も緊張しているため，開講式，オリエンテーションが終わった後は各グループに分かれ，ネームトス等の「アイスブレイキング」を行い，実習生同士ならびに実習生とスタッフの交流を深めた。また，これから４日間のキャンプ生活をお互いに信頼し，安心して生活できる環境にするため，グループ内でのルールを決める「ビーイング」（写真１）を行った。その後は，テントやタープの設営（写真２）を行って生活環境を整え，夕方からは初めての野外炊事としてカレー作り（写真３）に挑戦した。カレーとした理由は，学校教育現場でカレー作りは野外炊事と

写真１　ビーイング

写真２　初めてのテント設営

写真３　初めての野外炊事

写真４　ヒューマンチェア

して一般的であり教員養成の視点で捉えた場合，実習生が体験をとおして安全教育を含めた用具の扱いや手順といった野外生活技術指導法を学ぶ機会として適切であると考えたからである。

⑵　２日目

実習２日目は，グループの凝集性を高めるため，午前・午後ともにASEを行った。前半と後半では若干ゲームの構成が変わったが，アクティビティの流れとしては，「ヒューマンチェア」（写真４）や「私の自然」といったブレイク系のゲームから，「日本列島」や「エレクトリックフェンス」，ローエレメントを使った「ウージー」（写真５）や「人の字バランス」，「ヒッコリージャンプ」（写真６）といったイニシアティブ系のゲームへと展開する構成となるように配慮した。

なお，ASEの全体的な指導は，その教育的効果を最大限に発揮できるよう本学の非常勤講師である安原政志氏（自然教育促進会代表理事）にお願いした。

⑶　３日目

実習３日目は，標高751ｍの北日高岳登山（写真７）を実施した。気象庁の発表（2010年９月１日）によると，今年度の夏の平均気温（2010年６月～８月）は統計を開始した1898年以降の113年間で第１位の記録になるほど気温が高く，北海道でも８月の平均気温が５観測地点（帯広市，紋別市，枝幸町，雄武町，広尾町）で観測史上最高を記録したほどであっ

写真５　ウージー

写真６　ヒッコリージャンプ

た。そのため，北日高岳は比較的標高の高くない山であったが，スポーツ系の学生であっても暑さで体力を消耗する実習生が多かった。なお，本実習では，看護師資格を有する医療担当教員を配置し，スタッフ・実習生ともに登山準備段階から水分補給の重要性と体調不良時の自己申告等を徹底した。後半に実習生１名が登山中に熱中症の症状を見せたがスタッフの早期対応と医療担当教員の処置により病院受診には至っていない。下山後は麓の温泉で疲れを癒し，夜はグループごとに創作料理を発表する料理コンテスト（写真８）を行い，キャンプ最後の夜を楽しんだ。

⑷　４日目（最終日）

最終日は，テント等の撤収やキャンプサイトの清掃を行った。キャンプサイトの清掃ではグループごとに回収したゴミについて話し合う時間を持ち，集約した意見を全体に発表した。このアクティビティのねらいは，実習目標の１つである野外活動を通じて自然の素晴らしさや大切さに対する気づきを促し，環境保全意識の向上を図ることである。各グループの発表に対する総評は，プログラムディレクターが行った。清掃後は，一人ひとりが好きな場所に行き，この４日間のふりかえりとして自分の気持ちを紙に書いて表現する「マインドクロッキー」（写真９）を行った。その後，グループごとに４日間のまとめやふりかえり（写真10）を行い，閉講式を迎えた。

初日は緊張して表情の硬かった実習生も最終日にはたくさんの笑顔が見られ実習生同士

写真７　北日高岳登山

写真８　料理コンテスト

写真９　マインドクロッキー

写真10　グループでのまとめ

写真11　実習初日のグループ集合写真

写真12　実習最終日のグループ集合写真

の会話が活発に行われるようになった。また，実際の他者と距離の取り方も近くなった。以下は同一グループの実習初日（写真11）と実習最終日の集合写真（写真12）である。実習生には両日ともグループ集合写真を撮ることだけを指示した。本実習の全クループが同様の傾向を示した。

８．アンケート結果

本実習の実態や成果を分析・測定するため，実習生114名を対象にアンケート調査を実施した（有効回答数105名，有効回収率92%）。以下は，その調査結果の一部である。

⑴　教職課程を選択していますか。

１．はい（69名：66%）　２．いいえ（36名：34%）

⑵　「野外教育実習」を履修した理由を具体的に書いてください。（抜粋）

（教職課程選択者）

・一番の理由は教職必修の科目だから。あとは，色々な体験や経験の中から生まれる新しい自分を発見したかったから。

・この実習を通して自然をたくさん感じ，自分が教師になった時，子どもたちにしっかりと指導できるように集団活動の大切さなどを学びたいと思ったから。

・教職課程を選択していて自分のためになると思ったから。教師になった時，このようなことを知っている，体験しているということは役に立つと思ったから。

（教職課程未選択者）

・キャンプディレクターなど野外活動に関する資格や健康運動指導者など，将来は指導者の道に進みたいと考えているから。

・社会教育主事やキャンプディレクターの資格取得に必要であり，実習を通して自分自身を少し成長させることができると思ったから。

・私は集団生活が苦手なので，少しでもそういう場に慣れたいと思ったから。

⑶　「野外教育実習」の活動を通して学んだこと・気づいたことがありましたか。

１．ある（104名：99%）　２．ない（１名：１%）

（学んだこと・気がついたこと）

・ASE を通じてよい結果になるのは過程がしっかりとしているからということ学んだ。ゴールすることが大切じゃない。ゴールするためにチーム・班でどう協力してゴールするかが大切なことだと学んだ。

・仲間と協力して物事をやり遂げた時の達成感が素晴らしい。登山に自信がなく，登っている時は辛くてやめたいと思ったけど，仲間が支えてくれて前向きな気持ちになれたし，自分自身あきらめたくないという気持ちがあることに気づくことができた。

・食事，片付け，活動などすべてにおいて，コミュニケーションはとても大切であるということ。相手に思っていることを伝えなければ先には進めないし，仲間と意見を共有することでより良いアイディアが生まれる。

⑷　教員になるうえで役立つと思ったことはありましたか。（教職課程選択者69名のみ）

１．ある（68名：99%）　２．ない（１名：１%）

（役立つと思ったこと）

・人と接する職業である教員においてコミュニケーション能力は必要不可欠。集団行動やカウンセラーとのふれ合いから，人間関係やコミュニケーションの力というものの大切さを改めて教わった。

・キャンパーをまとめたり，スケジュールを把握して行動させたりするといったカウンセラーの動きを見ていて，教師が生徒のことを考えて授業などを展開するには，今行っていることだけではなく，常に先のことを考えて行動することが大事だと感じた。

・ASE や軽いレクリエーションなどは，学校の集団生活でも応用できると感じた。目標に対する課程をどのように設定すれば，生徒が意欲的に取り組むことができるようになるかなどを学ぶことができた。

９．体調管理及びファーストエイド（応急手当）

⑴　事前準備

①情報収集

「野外教育実習個人票」により，実習生と学生スタッフの健康状態や既往歴等について把握した。

②ファーストエイドバック

ａ．内科バックと外科バック（医療担当教員＜看護師＞及びキャンプディレクター用）

ｂ．携帯用（大）バック（プログラムディレクター及びチュータ用）（写真13）

ｃ．携帯用（小）バック（グループカウンセラー用）

写真13　ファーストエイドバック

⑵　体調管理とファーストエイドの体制

①実習生

グループカウンセラーは，実習生の体調確認を，日に数回（起床時，活動前，活動時，活動後，就寝時）行い，傷病がある場合は，医療担当教員に報告した。また，実習生自身も，傷病がある場合にはグループカウンセラーに自己申告し，グループカウンセラーが医療担当教員に報告した。その後，グループカウンセラー

は「傷病報告書」（表４）を記載し，全体ミーティング時に医療担当教員に提出した。

医療担当教員は，報告を受けた実習生の傷病を確認し，対応及び処置を行った。その後，プログラムディレクター及びキャンプディレクターに報告した。

②学生スタッフ（３年生，４年生，大学院生，ＯＢ・ＯＧ）

学生スタッフは，傷病がある場合には医療担当教員に自己申告した。

医療担当教員は，学生スタッフの傷病を確認し，対応及び処置を行った。その後，「傷病報告書」（表４）を記載し，プログラムディレクター及びキャンプディレクターに報告した。

表４　傷病報告書

傷　病　報　告　書

いつ？	日時　：　　年　　月　　日（　），午前・午後　　時　　分頃
どこで？ （発生場所）	
だれが？	氏名：　　男・女　学生番号：

【病気】

どのような状態？ （症状・徴候） あてはまるものに ○印	**意識**：あり・なし **症状**：発熱・さむけ・震え・多量の汗・だるさ・腹痛・下痢・気分不快・吐く・顔色が悪い・頭痛・めまい・ふらつき・力が入らない・けいれん・その他（　　） **移動**：自力移動可能・付添い必要・動けない
対処及び処置	温める（部位：　　）・冷やす（部位：　　）・衣服緩め・着替え 安静（横になる・足挙げ・座る）・水分補給（何を：　　、量　　） 食物補給（何を：　　、量　　） その他（　　）・市販薬投与（薬名：　　量：　　包・錠） 病院受診（診断名：　　、処置：　　）

【怪我】

どのようにして？ （受傷機転）	
どの部位が？ （受傷部位）	頭部・顔（部位：　　）・首・身体（部位　　） 上肢（上・下・手首・指）・下肢（上・下・足首・指） その他（　　）
どうなった？ （症状・徴候）	**意識**：あり・なし　**出血**　：あり（多・少）・なし **移動**：自力移動可能・付添い必要・動けない **症状**：擦り傷・切り傷・刺し傷・靴ずれ・まめ・打撲・捻挫・骨折やけど・腫れ・赤み・内出血・痛み・痒み その他（　　）
対処及び処置	傷（洗浄・絆創膏・ガーゼ・軟膏塗布＜薬名：　　＞） 止血（直接圧迫・間接圧迫）・安静挙上（上肢・下肢） 温める（部位：　　）・冷やす（部位：　　） 圧迫（弾力包帯・テーピング）・固定（副木・三角巾・その他＜　　＞） とげ抜き・毒抜き・その他（　　） 病院受診（診断名：　　、処置：　　）
記載者	

⑶　傷病発生状況

①概要

実習期間中の発生件数は，33件であった。このうち，実習生は25件（前半実習17件，後半実習８件），３年生は４件，４年生は４件（前半実習６件，後半実習２件）であった。

②特徴

ａ．傷病の発生時期及び場所（表５）

ｂ．傷病の程度

＊症状が早期に改善したもの　25件

＊経過観察が必要だったもの　8件

＊病院受診が必要だったもの　0件

ｃ．傷病の種類（表６）

③処置

病気に対しては，症状により，バイタルサイン測定，冷却，経口補液，市販薬投与，経過観察等を行った。また，外傷に対しては，切り傷は，傷洗浄，止血（直接圧迫），フィルム貼布，捻挫は，

表５　傷病発生時期及び場所

	前半実習				後半実習				
	１日目	２日目	３日目	４日目	１日目	２日目	３日目	４日目	計
キャンプ場内									
テントサイト	3	4	3	0	0	3	1	0	14
調理場	2	1	1	0	0	0	0	0	4
キャンプ場外									
自然の家敷地	0	2	0	0	0	1	0	0	3
北日高岳	0	0	2	0	0	0	5	0	7
その他	3	2	0	0	0	0	0	0	5
計	8	9	6	0	0	4	6	0	33

＊　その他は、実習前より症状を有していたもの

表６　傷病の種類

	前半実習				後半実習				
	１日目	２日目	３日目	４日目	１日目	２日目	３日目	４日目	計
病気									
風邪	(1)	1	0	0	0	1	0	0	2(1)
胃腸炎	1	0	0	0	0	1	0	0	2
熱中症	0	0	0	0	0	0	1	0	1
その他	(1)	1	0	0	0	1	0	0	2(2)
外傷									
切り傷	2	1	1	0	0	0	0	0	4
捻挫	(1)	1(1)	0	0	0	0	0	0	1(1)
肉離れ	0	(1)	0	0	0	0	0	0	(1)
靴ずれ	0	1	0	0	0	0	1	0	2
虫さされ	2	2	1	0	0	0	0	0	5
その他	0	0	4	0	0	1	4	0	9
計	8	9	6	0	0	4	6	0	33

＊（　）は、実習前より症状を有していたもの

冷却，湿布貼布，テーピング，経過観察等を行った。

Ⅲ．おわりに

本実習に参加した学生が実習後に提出したレポートでは「組織キャンプの参加者としての体験を通じ野外教育への知識と理解を深め，野外教育論で学んだ生きる力を育む野外教育の重要性を再認識した」との論旨記述が多くみられた。実習生のレポートの中から２題（資料１・２）を添付する。

本実習の目的は，組織キャンプの体験学習を通して，保健体育科教諭の養成を行うだけではなく，社会人に求められる基礎的な資質･能力の向上にも取り組むことをねらいとした。筆者らは，参加学生のレポートや実習中の行動記録から本実習の目的はある程度達成されたのではないかと捉えている。今後は，本実習で実施したアンケート調査による野外教育実習の教育的効果測定等を次年度以降も継続して行い，検証結果を実践研究として発表していく予定である。

Ⅳ．参考文献

粥川道子，山田亮，高等教育機関における野外教育の試み（１），北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要，創刊号，pp71-82，2010.3

付　　記

本研究は、「平成22年度北方圏生涯スポーツ研究センター研究費」の助成を受けて実施した。

謝　　辞

本学の非常勤講師である安原政志氏（自然教育促進会代表理事）には，実地踏査の際のスタッフトレーニングや実習での ASE の指導などで多大なる御協力いただきました。この紙面をお借りし，感謝申し上げます。

資料１　2010年度「野外教育実習」実習生レポート

今回の野外教育実習では、野外教育論で学んだことを十分に生かして行動できたと思う。まず、１日目では移動の件もあり、午後からのプログラムとなっており、開校式、オリエンテーション、テント等の設営があった。１つの班が６～８人の小集団で構成されており、初めて話す人が班の中に誰もが１人か２人いたのではないかと思う。そこで初日からコミュニケーション・ワーク（野外教育論プリント12）という班１人１人の関係がよくなる、且つ自分が相手との関わり合いを作るような話し合いをした。テント設営から班員全員で協力してコミュニケーションを取りながら活動できたと思う。親しい人と同じ班になる確率が低い中で、自分たちの班は初日からグループワーク（野外教育論プリント９）がすごくはっきりと現れていて、メンバーの態度について肯定的な変化をもたらしていっていると感じた。初日だけではなく、２日目以降もグループワークが班の中で大きく、強くなっていったと思う。２日目では、午前も午後もＡＳＥを行った。ＡＳＥとは、小集団による問題解決に着目した行動社会化経験（ＡＳＥ）型プログラム（野外教育論プリント７）である。午前のＡＳＥのプログラムは、身近にあうものを簡単に描写し、そのあとに全員が共通して同じものを簡単に描写するというものである。２つを描写し終わった後に班の人と、描写した絵を題材にして１対１で話し合うというゲームを行った。話す人を変えたり、人数を増やして話しをした。組織教育キャンプの定義（野外教育論プリント７）に基づいていると感じた。午後のＡＳＥプログラムでは、小集団（班）で、ある課題や問題を解決していくというプログラムを行った。自分たちの班は、Ｖ字になっている鉄線を全員で協力して渡るというもの、クモの巣という木と木の間に紐をクモの巣状に張り巡らされたとこを触れないでみんなでくぐるという２つのゲームを行った。ここでは、体験を通して１番みんなとの距離が近くなったプログラムだと思う。全員での協力、助け合い、目標の達成という１つの道を全員でやっていけたと強く感じた。野外教育の特色であるＪ.Smith の説である「学習者が最も活発」（野外教育論プリント４）ということと深く関係していると思うし、Priest and Gass の説である「体験学習は６つの感覚と３つの学習の領域を十分に活用する」（野外教育論プリント４）ということも同じく深く関係していると思う。ASE を自ら学び、体験し、学ぶ課程において「学ぶ」という気持ちがだいじであり、視覚、嗅覚、味覚、嗅覚、触覚、直覚、知的、情緒的、身体的を織り交ぜて ASE というプログラムをやったことにより、対人、自己、生態系、倫理という観点も見えたと思う。３日目は登山を行った。野外教育は、自然と触れ合い学んでいくことである。登山はその自然の中で身体を動かすアクティビティー（野外教育論プリント15）で、冒険教育に関係している。登山をやってみて、班全員で声を掛け、全員の状況を確認しあいながら登ったことは、野外における危険因子での外的要因や内的要因（野外教育論プリント16）を登山で１番気を使ったのではないかと感じた。４日目はキャンプ最終日だったので、午前にテントの撤収・清掃、マインドクロッキーを行った。３泊４日のキャンプを振り返ることは、直接的ではないが間接的に記録と観察（野外教育論プリント１２）に関わっているのではないか。マインドクロッキー以外にも１日の反省を毎日していて、それもここに関係していると思う。最後に反省や、その日を振り返ることにより、自分がどう変わったか、どういう心境になっていったかという自分自身を見つめなおすことが大事なので、「振り返る」ということは、必ずやっておくのがよいと思った。その他にも、毎日の炊事を班全員が協力してやることにより、結束力というものが生まれたと思う。　最後に、今回の野外教育実習を行い、改めて気づいたことは、「野外活動とは」「野外教育とは」（野外教育論プリント２）「野外教育の概念」（野外教育論プリント１）という３つの学んだことがその通りだったなと、このレポートを書いていて強く感じた。

（飯田壮俊）

資料２　2010年度「野外教育実習」実習生レポート

今回の野外教育実習では、非日常の自然の中で６～８人の小集団で行動する組織キャンプを体験させていただきました。教員を目指す者として又、人間として学ぶことが多くあり、大きく成長できたと実感できた実習でした。今一度、野外教育論等の授業を踏まえて振り返ってみると、何気なく行っていたことが習ったことと合致していて、まさに成しつつ学んでいたことに気付かされました。

私の班はキャンパー７人、カウンセラー１人の計８人の小集団でした。キャンパーのうち４人は学校で見かけても挨拶すらしたことのなかった人でした。最初のテント・タープ設営では、名前すらわからず設営し、互いに遠慮しながら協力して立てました。それからタープでアイスブレーキングをしてようやく名前と顔を覚え、夕食作りに取り掛かりました。少し溶け込んだ後の夕食作りでようやく会話が増え始め、初日からおいしいカレーライスが作れました。夕食作りでは、キャンパーの性格が一番強く見えました。指示をする人もいれば戸惑っている人もいて、一人ひとりの個性が少し理解できました。夜はビーイング・振り返りをして１日目が終わりました。ビーイングでは、みんなの意見を持ち合い話し合えたことで、一人ひとりの発想の違いが新鮮に感じられました。一日を振り返り、お互いを理解することからグループワークが始まることがわかりました。

２日目は、主に ASE のプログラムを体験しました。午前は安原先生の指導の下、グループの結束力を深めるプログラムを行いました。一人ひとり自然と触れ合い、思いのままに描いたスケッチをグループ内で発表し合いました。みんな個性があり、それを発表し合うことで自分の考えを伝えること、相手を理解することに対しての頭をたくさん使いました。心地いい自然の中ですることで、日常行う時よりものびのびとできた気がしました。この能力は社会に出てからも必要となる能力なので、とても良い刺激になりました。午後からは、少しリスクを伴うプログラムを行いました。グループ全員が協力しなければ解決できないプログラムを、全員で問題解決のために一丸となって行いました。みんなで協力して助け合い、障害をクリアできた過程が素晴らしい達成感に繋がったと感じました。その日の夕食作りでは、昨日より短時間でおいしい料理ができ、片付けも効率よく早く終わりました。その中で、「ありがとう」という言葉が昨日より段違いに増え、昨日以上に良いグループワークができていたことが、振り返りで気づけた時はとても感動しました。今日の成果が目に見えた夕食作りでした。

３日目は、登山を体験しました。険しい道を登っていく中で、障害がある道では先頭になった人が注意を払い後方へ伝えたり、一番ペースが遅い人を取り残すことなくペースを合わせ全員で頂上まで登れたことは、グループがまとまっていたからだと思いました。帰ってからの夕食コンテストでは、みんなの意見や知恵を出し合い、割り当てられた食材からは想像もできないほどのおいしいメニューができました。振り返りでは、初日からの個人やグループの成長を振り返り、短期間でここまで深く分かり合えるようになれる組織キャンプの素晴らしさが身にしみて理解できました。翌日は、撤収作業をしてからマインドクロッキーで最後の振り返りをして３泊４日のキャンプ実習を終えました。

全体を振り返って、新しい自分が発見できた実習となりました。グループの人達とは、心から思ったことを言い合える真の人間関係になれたと感じられました。体験した全てのプログラムが、社会への適応に繋がる要素が含まれていたことがわかり、これからの学校教育に必要とされている意味が理解できた実習でした。

（矢守悠貴）